

科学研究費補助金（基盤研究（S））研究進捗評価

課題番号	18103001	研究期間	平成18年度～平成22年度
研究課題名	景気循環・経済成長の総合研究－景気判断モデルの構築と日本経済の実証分析	研究代表者 (所属・職)	浅子 和美（一橋大学・経済研究所・教授）

【平成21年度 研究進捗評価結果】

評価	評価基準
A+	当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
A	当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
○	B 当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
C	当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である

(意見等)

本研究は4つの研究テーマ（景気循環に関する理論的研究、日本経済のデータ分析、景気指標の作成、経済制度の研究）に分かれており、モデル構築と実証の両面での貢献を目指しており、今までのところ、日本の景気循環の実証的検討と景気動向に関するデータ分析に関しては、ある程度の成果は上げている。とくに定期的な研究会（景気循環研究会、産業景気研究会）において研究発表や意見交換が行われており、研究の多くが査読誌や景気循環をテーマにした著書、研究雑誌の特集号において公表されている。

ただし、本研究は、当初目標を達成するにあたり4つの問題を抱えており、今後一層の努力が必要である。

その第1の問題は、一部の研究担当者の寄与が不明確で、研究担当者間の連携が不十分なように見受けられることである。5名からなる研究組織で、そのうちの2名（研究分担者である伊藤秀史氏、連携研究者である伊藤隆敏氏）との連携が必ずしも明らかでない。今後の研究を推進するにあたっては、研究代表者が組織内で強いリーダーシップを発揮し、研究組織内の有機的連携を密にすることを期待する。

第2の問題は、基盤研究（S）に相応しいインパクトのある成果（世界レベルの研究成果や重要な政策提言）がまだ見られないことである。たしかに、定期的に研究会やコンファレンスを開催し、その報告論文をまとめ、査読誌、著書、研究雑誌の特集号において研究成果が公表されているが、基盤研究（S）としては、不十分である。トップレベルの国際学会や英文専門査読誌に景気循環そのものに関する研究成果を発表するという、世界レベルの研究を目指す姿勢が必要だろう。さらに本研究終了後には、研究成果に基づき、まとまった内容の書物を英文で出版することも考慮に入れてもらいたい。

第3の問題は、海外の学者との国際的な交流が限られているという点にある。研究活動は国内に限定されており、世界レベルの研究を目指す姿勢が欠如しており、基盤研究（S）としては物足りない。海外の景気循環の専門家を招聘して国際的なコンファレンスを実施し、研究成果の発表、評価を行うことが望ましい。

第4の問題は、当初目標が設定された時点では予期できなかった世界金融危機、世界同時不況が現在進行中であり、こうした新たな事態を踏まえて、景気循環の問題を分析することが喫緊の課題になっているという点である。各国の間で景気の連動性が高まっており、とくに日本の景気循環を分析するにあたっては、アメリカ経済や世界経済のショックの影響、内外の金融的なショックの影響の分析が欠かせない。この点に関する研究を深め、世界的なマクロ経済運営を考える上で、有益な経済政策上の提言が生まれることを期待したい。

これらの点を深く考慮し、基盤研究（S）に相応しい学術上の成果を上げることを大いに期待する。

【平成24年度 検証結果】

検証結果	研究進捗評価結果と比べ、十分進展した研究成果であった。
A	具体的には、2008年のリーマンショック以降の世界金融危機及び同時不況について、景気循環研究を進展させた。速報性と正確性・頑健性をもつ新しい景気指標の構築、リアルタイムでのデータを用いた景気予測、判断などで進展があった。研究進捗評価以降、海外での学会報告を積極的に行ったり、研究成果をまとめた書物を英文で出版したり、国際的な学術雑誌にも研究成果を公表しており、成果の公表という面でも十分進展したと認められる。